



# 日本植物病理学会ニュース 第102号

(2023年5月)

## 【学会活動状況】

### 1. 大会開催報告

令和5年度日本植物病理学会大会は、南関東の会員で組織した運営委員会により運営され、3月27日(月)～29日(水)の3日間、オンライン形式で開催されました。開催時期の3月下旬では新型コロナウイルス感染症がほぼ収束していた感がありましたが、大会準備を開始した2022年秋には全く収束を見通せない状況であったため、参加される会員の健康面を考慮してオンライン方式の開催としました。今回の大会では、オンライン開催のメリットを最大限に生かすような工夫を凝らしました。まず学術講演は、オンラインの特性を活かし動画を大会期間中および大会終了後も1週間視聴可能としました。これにより時間の制約を受けずに多くの講演を視聴し、議論に参加することができたり、同じ講演を納得が行くまで何度も視聴したりすることができたかと思えます。一方、平塚和之会長による会長講演「私のファミリーヒストリー」、学会賞受賞講演「マイコウイルスを用いた果樹類白紋羽病の制御技術に関する研究」(兼松 聡子氏)、「いもち病菌のエピジェネティクスと病原性に関する研究」(中屋敷 均氏)、「土壌伝染性病害の予防的管理に関する研究」(吉田 重信氏)、及び学術奨励賞受賞者講演、「タマネギベと病菌等の病原体の検出・診断技術の開発」(藤原 和樹氏)、「植物ウイルスの同定、性状解明及び多様性解析」(キム オッキョン氏)、「土壌伝染性植物病原菌の検出に関する研究」(日恵野 綾香氏)は、臨場感を醸成するためライブの動画発信としました。さらに、農業工業会 オンラインセミナー「食料安定供給における作物保護の重要性」、日本植物病理学会 第1回 ダイバーシティ推進セミナー「見つけよう！あなたの中の無意識のバイアス」などのプログラムに加えて、今回は最近若者向けの人気コミック雑誌で連載が始まった植物病理学を主題とした漫画の作者らと会員が自由に意見交換する特別イベント「植物病理学がマンガになった！」も企画しました。近年、本学会においては若年層の会員を増やすことが

重要とされていますが、特別イベントにより漫画という媒体はこの目的に沿うものだという共通認識を持つことができたようです。

オンライン開催ではありましたが、参加者は798名、248課題の一般講演が行われ、チャットによる書き込みを通じた議論も盛んに行われました。チャット書き込みを介した議論は、口頭による議論に比べて迫力は無いものの、論理的な書き言葉を利用したより科学的な議論ができたのではないかと思われました。また、学生による発表も活発に行われ、97課題の講演が学生優秀発表賞の審査対象となりました。

参加申し込みは、学会の資産であるダイナコム申し込み・参加費支払いシステムを利用しました。ほとんどの会員は問題なくクレジットカードまたはコンビニ振込による支払いを完了することができたようです。一方で、特に公費払いをされる都合で従来通りの請求書の発行と指定口座への払い込みを希望される会員もおられました。これは所属機関の会計処理規定に関わる問題で、なかなかすぐに解消する問題ではないと思いますが、大会事務の合理化・簡素化の観点からは、できるだけ支払い方法は一本化することが望まれます。

大会期間中は、参加される会員の皆様をお待ちしていたかのように東京農業大学厚木キャンパス内の桜が満開となりました。オンラインから流れる動画の音声を聞きながら、桜吹雪を見ていると少々もったいない気分にもなりましたが、何とか成功裏に大会を終了することができ安堵しております。開催にあたりましては、会長を始めとする学会役員と学会事務局の皆様、座長や優秀発表審査をお引き受け頂いた評議員の皆様、協賛・ご協力頂いた諸団体、開催準備・運営に当たった運営委員諸氏、そして事細かに準備を進めて頂いた運営受託企業の皆様には厚く御礼申し上げます。

(大会委員長 岩波 徹)

## 2. 研究会・談話会等開催報告

### (1) 第29回植物細菌病談話会

第29回植物細菌病談話会が、2022年12月3日に法政大学小金井キャンパスにおいて、対面およびZoomによるハイブリッド形式で開催されました。植物細菌病談話会は通常は隔年で開催してきましたが、当初から2020年はスキップする予定であったため、前回の第28回が高知大学で行われてから4年ぶりの開催となりました。また、今回は学会からのご支援のみで開催費用を賄うことができたため、参加費は無料とさせていただきました。日本植物病理学会のご支援に厚く御礼申し上げます。

参加者は各都道府県の公設試験場、国立研究開発法人、企業、大学教員や学生など総勢161名であり、そのうち会場にお越しくくださった対面での参加者は27名でした(写真)。他の研究会・談話会でもオンラインを併用すると参加者が多くなる傾向がありますが、植物細菌病談話会としてもこれまでで最も参加者が多い開催となりました。これもご講演の内容が魅力的だったおかげであり、快くご講演を引き受けてくださった演者の先生方に心より感謝申し上げます。

今回の談話会では特別講演1題を含む5題の講演についての発表と討論を行いました。最初のご講演は、石賀康博氏(筑波大学生命環境系)による「*Pseudomonas*属細菌の感染機構から見てきた新たな防除法」の演題で、実際の農業現場で病害を引き起こしている*Pseudomonas*属細菌について、網羅的な病原因子の同定、そして感染機構の解析から見てきた新たな防除法について紹介していただきました。2題目は前島健作氏(東京大学大学院農学生命科学研究科)による「ファイトプラズマによる葉化病の普遍的分子機構」の演題で、ファイトプラズマが分泌する葉化誘導因子ファイロジェンが幅広い植物で機能を発揮できる仕組みや、ユビキチンに依存せずにプロテアソームを利用して標的タンパク質を分解する分子機構についてお話いただきました。

3題目は、特別講演として瀧川雄一氏(静岡大学名誉教授)に「思いがけない「気づき」と展開・・・未完の研究の話」の演題でご講演いただきました。*Pantoea*属細菌や*Pseudomonas*属細菌などを中心に、常識から外れた実験結果への気づきが研究の大きな発展につながった事例をご紹介いただきました。経験を重ねるとどうしても見る目にバイアスがかかるが、未知の現象に出くわして、それに基づく新たな気づきが生じた時のワクワク感は何にも代えがたいものがあるとの話をされ、まさに研究の面白さの本質が伝わる素晴らしい特別講演でした。



写真 会場の様子

4題目は、向原隆文氏(岡山県農林水産総合センター生物科学研究所)による「ナス病原性の青枯病菌を生み出したエフェクター遺伝子変異」の演題で、青枯病菌のHopBF1エフェクターがナスにHRを誘導すること、そしてHopBF1が植物のHSP90を標的とするプロテインキナーゼである可能性についてご講演いただきました。最後は、都筑正行氏(高知大学農林海洋科学部)による「遺伝子発現動態から迫る青枯病菌の感染機構」の演題で、青枯病菌のトランスクリプトーム解析から見えてきた感染過程全体におけるクオラムセンシングの役割についてご講演いただきました。

いずれの講演でも会場やZoomから多くのご質問をいただき、活発な意見交換ができました。新型コロナ禍が続く状況であったため情報交換会は実施しませんでした。会場にお越しいただいた参加者のみなさまに交流の機会を作るために休憩時間を長めに設定しました。また、休憩時間を利用して法政大学応用植物科学科の温室をご案内させていただき、Zoomでも配信しました。談話会後に実施したアンケートでは、講演内容が魅力的で大変勉強になったとの回答が数多く寄せられ、また特別講演については退官された先生の経験談が大変興味深く、若手への財産になるので今後もぜひ実施してほしいとのご意見をいただきました。

ご講演いただいた先生方には、お忙しい中、講演要旨の作成を含め大変ご苦労いただきました。演者の先生方に重ね重ね感謝申し上げます。また、活発な討論とスムーズな進行に協力いただいた参加者の皆様に深く御礼申し上げます。次回の植物細菌病談話会は2024年に筑波にて開催する予定です。次回も多数のご参加をお待ちしております。

(大島研郎)

### (2) 第32回殺菌剤耐性菌研究会シンポジウム報告

第32回殺菌剤耐性菌研究会シンポジウムは、前回同様新型コロナウイルスの状況を勘案しオンラインでの開催と

なったが、大会委員長の岩波先生や昨年に引き続きホスト局としての機能を引き受けて頂いた日本植物防疫協会より多大なご協力を賜り、2023年3月30日に無事開催することができた。手軽に聴講できることもあり、公的機関、大学、農薬メーカーおよび農業団体などから200名余りの方々に参加いただき、また口頭による質疑に加え、チャット機能を用いた質問も活発に行われ盛会となった。最初の演題でチャット機能が使えないトラブルがあったものの、その他には大きなトラブルはなく無事閉会を迎えることができた。

最初の発表は、佐賀県農業試験研究センターの古田明子様より「佐賀県におけるメタラキシル M 耐性タマネギベと病菌の現況と防除対策再構築に向けた取組み」と題して、2016年に大発生したタマネギベと病に対する取り組みについて紹介頂いた。本病害の生態解明と新たな防除技術の確立についてご説明頂き、さらに総合的な防除対策として、保護殺菌剤の防除を基本とすることや耕種の防除、育苗床の土壤消毒などの対策を紹介頂いた。これらの対策を確立する上で、農研機構、各県、大学、農業団体など各機関が一丸となって取り組んだことが、短期間での封じ込めに大きく寄与したものである。次に、岡山県農林水産総合センター農業研究所の苧坂大樹様より「岡山県におけるブドウ主要病害の薬剤耐性菌の発生とその防除対策」と題して、岡山県のブドウ主要病害における薬剤耐性菌の発生状況および販売戦略に対応した耐性菌リスク管理について紹介頂いた。各種病害に対する薬剤の防除効果だけでなく、高品質を維持するため、果実の汚れや果粉溶脱等の外観品質に対する影響を加味した詳細な検討も紹介頂いた。各項目を考慮すると薬剤の選択肢が少なく、ローテーション防除の必要性和新規系統の薬剤の重要性を指摘頂いた。午前中の最後は福岡県農林業総合試験場の菊原賢次様より「福岡県におけるナシ主要病害の薬剤耐性菌の発生とその防除対策」と題して、福岡県のナシ主要病害における薬剤耐性菌の発生状況を踏まえた防除体系について紹介頂いた。複数の病害のDMI剤やQoI剤の耐性菌発生を受け、現地試験の中で保護剤との混合剤や他系統剤を組み合わせ、防除体系を改良していった過程をご説明頂いたが、耐性菌リスクの増加や散布量削減の行政ニーズがあることから耕種の防除や抵抗性品種の開発の必要性についても示唆頂いた。

午後の1題目は、住友化学株式会社の倉橋真様より「新規SDHI殺菌剤インピルフルキサムの特長と感受性試験」と題して、インピルフルキサムの作用特性とベースラインの把握を目的とした感受性評価法の検討例について紹介頂いた。SDHI剤が多数上市される中、耐性菌マネジメント

のために感受性モニタリングが今後より一層重要となるものと思われ、5種類の菌種に対して、感受性検定法およびベースラインを示唆頂いたことは意義深い。次に三井化学アグロ株式会社の萩原寛之様より「殺菌剤トルプロカルブの二つの作用機構とイネいもち病菌の感受性推移」と題して、トルプロカルブの作用機構とイネいもち病菌の感受性モニタリング結果について紹介頂いた。トルプロカルブはFRACの作用機構分類ではMBI-Pに分類されているが、抵抗性誘導活性も有しているユニークな剤であることをご説明頂いた。メラニン合成阻害剤の中でもMBI-P剤については耐性菌の報告はないものの、菌叢着色を指標とした感受性モニタリングを継続実施中と紹介頂いた。最後の演題は、コルテバ・アグリサイエンス日本株式会社の播本佳明様より「農業用殺菌剤のブロック散布とその耐性菌対策」と題して、海外における薬剤の連続散布（ブロック散布）での防除について紹介頂いた。ブロック散布は例えば1作期3回の散布を想定した場合、ローテーション散布で間に他剤を挟むより、集中して連続散布をする方が薬剤暴露期間の短縮となり、EUでは耐性菌対策の有効な解決策とされている。ただし、ブロック散布を行うにあたり、予防散布の徹底、混合剤もしくは他剤と現地混用して散布、感受性モニタリングの実施など注意点も合わせてご説明頂いた。日本はローテーション散布が広く浸透しているため、本方法に違和感を覚える方も多いと思うが、先の注意点を守れる条件付きで、剤や病害によっては検討に値する、貴重な考え方を共有頂いた。

最後に、本シンポジウムの開催にあたり、貴重な情報を提供頂いた講演者の方々および多数の質問をお寄せ頂いた参加者の皆様に改めて厚くお礼申し上げます。また、アンケートも多数お寄せ頂き感謝申し上げます。より良いシンポジウムとするべく今後の参考にさせて頂きたい。次回も多数の皆様のご積極的なご参加をお願いしたい。（黒木信孝）

### (3) 第6回植物病理を紡ぐ会開催報告

第6回植物病理を紡ぐ会は、植物病理学会大会前々日にあたる令和5年3月25日にオンラインにて開催された(写真1)。前身である『全国「若手の会」を目指して』勉強会より数えて8回目となった今回は、大学、公的研究機関、企業から203名(学生65名)の事前参加登録を得て(約130人の同時接続を確認)、活発な質疑応答が行われ、非常に熱のこもった勉強会となった。

これまで植物病理学会のいくつかの部会では、学生・若手会員の研究交流・情報交換・交流を深める場として「若手の会」があり、活況を呈してきた。「植物病理を紡ぐ会」

は、そのような場を全国大会の場でも作り、特に学生・若手会員に対して、①「現場から実験室まで」、「基礎から応用まで」という植物病理が扱う対象の広さ、面白さに触れてもらい、②そのような植物病理学を学んだ人間の人生・将来の選択肢の広さを知ってもらうこと、さらには③業種や分野の垣根を超えた植物病理に関わる人間の異分野交流、の3点を目的として、文字通り、植物病理の「分野」と「人」を紡ぐための場として企画された、植物病理学会若手・中堅有志による自主勉強会である。本会では、植物病理の幅広い分野からの講師を招き、現在の研究や職務だけでなく、学生時代から今の研究・職務へと至る「半生史」をご紹介いただくこととしている。現在、各方面で活躍されている方々がそれぞれ人生の岐路でどんなことを考えて、どんな選択をしてこられて今に至るのか？という、いわゆる研究・職務の裏側に触れる機会というものは、若手・中堅研究者にとっては示唆に富んだ貴重な経験になるのではないかと考えている。

そのような趣旨のもと、今回は、坂田七海氏（筑波大学）による「博士号取得までの道のり～経験×選択の積み重ね～」、藤原正幸氏（ヤンマーホールディングス株式会社）による「農機メーカーであるヤンマーが取り組む「植物病理研究」について」、清水将文氏（岐阜大学）による「発病抑止土壌をつくるという夢を叶えたい」、さらに、中野

亮平トーマス氏（マックスプランク植物育種学研究所、現北海道大学）による「植物マイクロバイオータ研究の新時代を創り出すために」という4題の講演をお願いした。まず、坂田氏からは、研究室配属から博士号取得、そして今に至るまでの研究成果に加えて、日々の心境について紹介いただいた。「周りにいる大学教員や研究者の方々が楽しそうすぎた！」と研究を続けると決心したきっかけについて語っていた姿が印象的で、個人的にも、「好奇心からワクワク・ゾクゾクしながら楽しむ」という研究の本質について再認識する機会となった。藤原氏からは、学生時代、ポスドク・教員時代、そして企業への就職に至る過程での経験や感じたことを共有いただくと共に、ヤンマーが取り組んでいる植物病理研究についてお話いただいた。企業での研究について知る大変貴重な機会となった。続いて清水氏からは、発病抑止土壌に関する話題を提供いただいた。当該研究は、学部3年生時の講義で話を聞いたことがきっかけであり、長年地道に研究を進めたことにより、重要な化合物の発見に繋がったとの話を聞き、「興味を持ったことを追求し続ける」という研究者精神について改めて考える機会となった。そして中野氏からは、植物マイクロバイオータに関する最新の知見と今後と展望について紹介いただいた。素粒子物理学者になりたかった高校時代、大学の講義を受け生物学の面白さに気づき、小胞体の膜ダイナミクスを研究した学生時代、そして偶然の出会いもあり、ドイツに渡り始めた現在の研究という様々な人生の節目において何を思い、また踏み出すきっかけとなった恩師とのやりとりなどを、赤裸々に紹介いただき、特に学生・若手会員にとって、大変参考になる内容であったと感じた。

さらに、一時代を築かれた経験豊かな講師から若手中堅へのメッセージも含めて「半生史」を語っていただきたい、という声から始めた特別講演として、今回は眞山滋志氏（神



写真1：参加者一同（一部抜粋）

## 植物病理学との出会いが創った道

神戸大学名誉教授 吉備国際大学特任教授

眞山滋志

2023年 3月25日

日本植物病理学会  
「植物病理を紡ぐ会」オンライン会議



写真2：特別講演の様子

戸大学名誉教授、吉備国際大学)に「植物病理学との出会いが創った道」と題し、ご講演いただいた(写真2)。日米植物病理科学セミナーの歴史を振り返り、時代と共に扱うテーマが「生理・生化学」から「分子」、そして「ゲノム」と移り変わってきた様子を紹介いただいた。紆余曲折の研究者人生での様々な研究成果について紹介いただいたが、中でもエンバクピクトリア葉枯病菌が産生する宿主特異的毒素ピクトリンの同定や作用機構に関する話には、大変感銘を受けた。以下に、講演・質疑応答の際にいただいたメッセージを幾つか紹介したい。研究人生、自分自身でやれる期間は短い。その後は、若い方を信じて進める。それにはチームワークが必要で、否定的ではなく、希望を持って進めることが大切。辛い時には「元気で、楽しく、笑顔で」と言うこと、すると自分の力が100%出せる。そして、研究する上で大切なことは、「何をやりたいか、チャレンジすることに魅力を感じる」こと、すなわち「Challenge for change」。以上、眞山氏のありがたい・力強いメッセージを参加者一同、心に刻み込むことができた。

以上のように、限られた時間ではあったが、多彩な講演者の研究に対する熱意および「半生史」を参加者一同共有させていただいた。本勉強会の目的の一つの異分野交流に関しては、セミナー終了後、ウェブ懇親会を行い、活発な意見交換が行われた。末筆ではあるが、週末の開催にも関わらずお集まりいただいた参加者の方々、また、多忙な時期にも関わらず(しかもボランティアで)お引き受けいただいた講演者の方々に、世話人一同心よりお礼を申し上げます次第である。(浅井秀太)

#### (4) 第1回ダイバーシティ推進セミナー報告

日本植物病理学会における男女共同参画/ダイバーシティ推進は、令和4年度から男女共同参画推進委員を増員して活動を強化しています。初めの一步として、ダイバーシティ推進に必要なことを会員の皆さまと学ぶことを企図して、第1回セミナー「あなたの中の無意識のバイアス」を3月28日12時~13時にオンライン開催しました。

冒頭、令和4年度学会長 増田 税教授のご挨拶では、本活動による推進は『植物病理学分野の人材に等しくチャレンジする機会を与える』ためにも必要であり、選ぶ側のバイアスによって機会が損なわれてはいけないことを、海外での研究機会をだれに与えるかとの具体的な例にて示され、支援体制を整える必要性を含めたメッセージがありました。東洋大学 北村英哉教授からは、無意識のバイアスの専門家としてご講演いただきました。マイノリティは差別されやすいことや、マジョリティ(例えば男性側など)



写真 男女共同参画推進委員@東京農大からセミナー発信

による、悪意がなくてもある種の視点を欠落したステレオタイプ的な味方をしてしまうことがあるなど無意識のバイアスについて分かりやすい実例を示しながら紹介がありました。また、人に原因を求め排斥するのではなく、「行動」を議論すべきであること、ヒトを人間たらしめるのは理性であり、行動をコントロール出来てこそ人間であるとのこと。さらに、意識を持って相手の視点に立つことで、感情や優しさだけではなく合理的な配慮や判断ができること、バランスを欠いた構成比の状況では一定期間のアフェーマティブアクションが必要との説明がありました。

続いて、委員会より日本植物病理学会における男女共同参画推進活動の歩み、令和4年度ダイバーシティ推進に関する意識調査アンケートの集計結果について紹介しました(アンケート結果は別途、学会ホームページでも掲載・報告いたします)。最後に、令和5年度学会長 平塚和之教授より、本セミナーにて今後の学会の活動における重要なキーワードを北村先生より沢山いただいたことへのお礼と今後の活動の重要性についてのご挨拶で締めくくられました。

本セミナーには100名を超える方に参加いただき、セミナー後のアンケートには「このような意識付けは継続的に必要」、「学術的にこの問題を紐解いていくのは有意義」、「学会としてのダイバーシティ推進に向けた制度の検討を」などの声がありました。

ダイバーシティ推進は、一度きりの活動ではなく継続することが重要です。植物病理分野に関わるあらゆる皆さまのチャレンジを学会として応援することで、さらに風通しがよく、自由で闊達な学会・研究環境となることに本活動が貢献できればと考えております。(兼松聡子)

#### (5) 特別一般公開企画「植物病理学がマンガになった！」報告

オンライン開催となりました令和5年度日本植物病理学



写真 『植物病理学は明日の君を願う』主人公の叶木先生

会大会（運営事務局：東京農業大学）において、特別一般公開企画として「植物病理学がマンガになった！」を会員も非会員も参加できるトークイベントとして開催しました。令和5年3月29日（水）12：30～13：00の30分間と比較的短い時間での開催でしたが、アクセス数は329に上り大盛況をいただきました。画面越しに複数での視聴もあったと考え、参加いただいた方はかなりの数だったと想像します。この企画は、昨年9月から「週刊ビッグコミックスピリッツ」(小学館)で月1回の連載が始まった『植物病理学は明日の君を願う』の作者の竹良 実さん、編集者の山内菜緒子さん（小学館）、監修者の晝間 敬先生（東京大学）、さらに漫画作成協力者の代表者&企画提案者として岩館康哉さん（岩手県農業研究センター）をパネラーとしてお迎えして、作品への思いを語るトークイベントとなりました。岩館さんから作品の紹介後、山内さんから竹良さんの紹介と続いた後、晝間先生に加わっていただき、事前に募集した質問にお答えいただきながら、思いを語る20分間となりました。いただいた多くの質問からイベントでは、植物病理学を漫画にしようと思ったきっかけ、どうやって情報を集めているのか、作品がターゲットとする読者層、監修依頼を受けたときの気持ち、ノンフィクションとフィクションとのバランス、主人公である叶木先生のキャラクターコンセプトなどについてパネラーの皆さんにお伺いしました。その中で、竹良さんから「植物病理学は

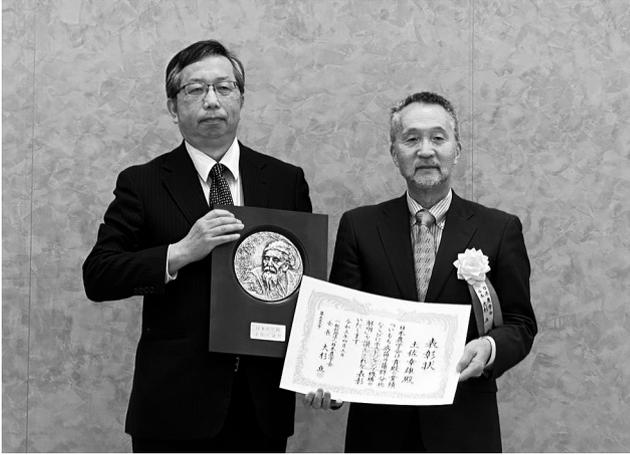


写真 オンライントークイベントの様子

人類を救うヒーローものそのもの」とのお話がありました。一般の皆さんにも植物病理学の大切さが伝わるとともに、会員はもちろん関係者の皆さんには励みになる一言だったのではないのでしょうか。山内さんからは「学生さんが進路を迷う中で励まされる作品に」、晝間先生からは「作品の世界観を壊さないように」など作品に対するそれぞれの立場からの思いを語っていただきました。イベント後のアンケートでは、参加いただいた皆さんからとても好意的な感想をたくさんいただきました。これらは「植物病理学は明日の君を願う」はもちろん、植物好きからとり着き植物病理学を描いていただいている竹内さんの励みになれば本当に大成功です。皆さまには事前の質問、当日の拙い司会・進行にもお付き合いをいただき、大会運営事務局の企画担当者として感謝を申し上げます。最後に、パネラーの皆さん、ご参加をいただいた多くの皆さんに厚く御礼を申し上げます。どうもありがとうございました。（篠原弘亮）

#### 【会員の関連学会等における受賞のお知らせ】

土佐幸雄氏（神戸大学大学院教授）が2023（令和5）年度「日本農学賞」/「読売農学賞」を受賞されました。日本農学賞は日本農学会が選考会を行い、日本の農学研究者間における最高の栄誉として毎年授与を行い、同時に読売農学賞へ推薦する形式が取られています。受賞の対象となった研究業績は「いもち病菌の菌群分化ならびに宿主ジャンプ機構の解明」です。日本農学賞受賞式・読売農学賞受賞式は、第94回（2023年度）日本農学大会（2023年4月5日、東京大学弥生講堂）にて行われました（写真）。授与式および受賞講演では土佐氏に縁のある会員がお祝いに駆け付け、またオンライン配信でも多くの会員が受賞を祝われました。（宮田伸一）



### 【今後の学会活動の予定】

#### 1. 2024 年度大会

日時：令和 6 年 3 月 13～15 日

場所：仙台国際センター

事務局：東北大学大学院農学研究科 植物病理学分野

#### 2. 部会

##### (1) 北海道部会

日時：令和 5 年 10 月 12～13 日

場所：北海道大学

##### (2) 東北部会

日時：令和 5 年 9 月 14～15 日

場所：弘前大学

##### (3) 関東部会

日時：令和 5 年 9 月頃

場所：玉川大学

##### (4) 関西部会

日時：令和 5 年 9 月 23～24 日

場所：近畿大学 奈良キャンパス

##### (5) 九州部会

日時：令和 5 年 11 月 29～30 日

場所：長崎県農協会館

#### 3. 談話会・研究会等

##### (1) 第 57 回植物感染生理談話会

日時：令和 5 年 9 月 4～6 日

場所：岡山大学（岡山市）

##### (2) 第 17 回植物病害診断教育プログラム

日時：令和 5 年 9 月 4～8 日

場所：岐阜大学

##### (3) 第 15 回植物病害診断研究会

日時：令和 5 年秋予定

##### (4) EBC 研究会ワークショップ 2023

日時：令和 5 年 9 月頃

### 【書評】



監修：西尾 健・津田新哉 編集：堀江博道・鍵和田 聡・中山喜一・橋本光司

「増補改訂版 植物医科学実験マニュアルー植物生育障害の基礎知識と臨床実践を学ぶ」

「増補改訂版 植物医科学実験マニュアルー植物生育障害の基礎知識と臨床実践を学ぶ」

B5 版 544 ページ（うちカラー口絵 40 ページ）／2023 年 4 月発行

(株) 大誠社 ISBN 978-4-86518-191-3

本体価格 7,800 円（税込）

本書は、法政大学植物医科学センターが 2016 年に出版した「植物医科学実験マニュアル」に、新しい内容を 40 ページ分も追加し一層充実させた増補改訂版である。タイトルが「実験マニュアル」となっているように「植物医科学」を専攻する学生向けの実験書として編まれた本であるが、その内容は初版本と同様に実験書の域を大きく超え、実用的な参考書、あるいは技術書と言える書籍である。サブタイトルは「植物生育障害の基礎知識と臨床実践を学ぶ」となっており、「植物医科学」の対象を植物生育障害と広くとらえ、植物生育障害の原因となる植物病害をはじめ生理障害や虫害なども視野に、それらの診断対処に必要な技法や知識を習得し、現場で実践できるように様々な工夫が施されている。

基礎と実際の 2 編に分けられ、両編とも実験を軸に、その内容に関連した、しかも必要性が高い技法・知識・情報等を幅広く取り上げ分かりやすく解説されている。構成の軸となる実験は、読めば誰でも実施できるように懇切丁寧に説明されているだけでなく、付随してポイント、ミニ実験、レポート、ステップ UP の項が設けられ、実施した実験をさらに掘り下げ、あるいは他の実験や実習に展開できるように上手に構成されている。取り上げている実験は、顕微鏡観察や培地作成などの基礎から病原体の分離や接種方法などの基本的な実験、さらに最新の遺伝子解析技法まで、植物病理学に必要なと考えられる実験はほぼ網羅されている。さらに、「微小昆虫およびダニ類の観察」「育種の基礎実験～不稔と不和合性～」など植物病理学以外の他分野

にも適宜踏み込むとともに、「植物病害の発生生態調査」「植物病害の防除試験」など各種の調査や防除試験，さらに薬剤耐性検定などの実践的な試験まで多様かつ幅広くカバーしており，植物病理や植物防疫の実用的な参考書あるいは技術書として十分な内容となっている。

本書には類書と異なる特徴がいくつかあるが，その一つは，図や写真が実に豊富に掲載されていることである。被害症状などカラーでないとも効果が減ずるものは冒頭の40ページにわたるカラー図版に納められている。そのカラー図版を含め本書全体で217もの図が掲載されており，本文中では，特に，病原菌の胞子の形態は著者以外の方々から提供された貴重な図や写真も加わりミニ図鑑並みに非常に充実しているし，最新の技法のため操作が難しい遺伝子診断や血清診断の説明も適切な図解によってわかりやすくなっている。随所にノートやコラムの欄が設けられていることも本書の特徴の一つである。ノートは第Ⅰ編で18，第Ⅱ編で22あり，取り上げているテーマは多彩で，たとえば，基本となる菌の同定法を解説した「植物病原菌の形態による同定」，未知種または十分に性質が明らかでないウイルスの診断同定法を解説した「植物ウイルスの代表的な属とその性状」，現場でも使える簡易な細菌の同定法を解説した「植物病原細菌の簡易判別法」などのほか，野菜・花卉類の重要病害の概説や「環境に配慮した土壤消毒技術」などの防除技術関係の解説などもある。解説文は通り一遍でなく，ほとんどのテーマが数ページにわたり詳しく記述されているが，詳しいけれども読みやすく，そしてわかりやすく書かれているので，専門的な知識や情報がさりげなく習得できるようになっているのは親切である。一方，コラムは，行政や社会との関わりを解説した，科学書としてはユニークな「植物医科学の関連事業と社会的役割」の項に収録されており，「植物防疫法の目指すもの」「農薬取締法の歴史」「地域社会に貢献する樹木医」など，行政や社会への理解や見識を深め広めるのに役立つテーマが行政等で一線を担った専門家によって分かりやすく解説されている。

本書は，法政大学のスタッフと外部専門家総勢40余名の方々が著者・校閲者としてそれぞれの専門に応じて細かく分担し協力して執筆されている。実験やテーマの一つ一つが非常に詳しくしかも分かりやすく書かれているのもうなずける。本書の価格は決して安くはないが，それに見合うあるいはそれ以上の内容が分厚い544ページの中にぎっしり詰まっている。

植物病理・植物防疫の試験研究や業務では植物生育障害に関する各種の問題に立ち向かわなければならぬ。これまでの経験や使える技法，知っている知識だけで

解決が難しい場合は少なくなく，参考書の助けが必要となるだろう。そのような時には幅広く技法や知識を網羅している本書が大いに頼りになる。それでも用が足りずさらに調べることが必要になった時には，本書の巻末に9ページにわたって記載されている参考図書のリストが助けになる。いずれの場合も，本書が手元にあると重宝なことは間違いない。植物病理を学ぶ学生をはじめ，植物病理の試験研究者・技術者・教員，さらに植物防疫に携わる関係者に本書をお薦めする。高橋 賢司（元農研機構・日植防）

#### 【学会ニュース編集委員コーナー】

学会ニュースは，身近な関連情報を気軽に交換することを趣旨として発行されております。会員の各種出版物のご紹介，書評，学会運営に対するご意見，会員の関連学会における受賞，プロジェクト研究の紹介などの情報をお寄せ下さい。下記宛先まで，よろしくご依頼申し上げます。

投稿宛先：〒114-0015 東京都北区中里2-28-10

日本植物防疫協会ビル内

学会ニュース編集委員会

FAX：03-5980-0282

または，下記学会ニュース編集委員へ：

門田育生，染谷信孝，大里修一，石橋和太

#### 編集後記

学会ニュース第102号をお届けします。令和5年度日本植物病理学会大会は3月27日～29日の3日間，オンラインで開催され，約800名の参加があったとのこと。大会運営委員会として対面開催か，オンライン開催かで，非常に悩まれたことと思います。一方，オンライン開催のメリットを最大限に生かした工夫とノウハウはアフターコロナの大会にも生かされるものと思います。第29回植物細菌病談話会は，前回の第28回が高知大学で行われてから4年ぶりに法政大学小金井キャンパスにおいて，ハイブリッド形式で開催されました。第32回殺菌剤耐性菌研究会シンポジウムは3月30日にオンラインで開催されました。口頭による質疑に加え，チャット機能を用いた質問も活発に行われ盛会でした。第6回植物病理を紡ぐ会は，3月25日にオンラインにて開催され，大学，公的研究機関，企業から203名の事前参加登録があり，活発な質疑応答が行われました。男女共同参画推進委員による第1回ダイバーシティ推進セミナー「あなたの中の無意識のバイアス」が，3月28日にオンラインで開催され，100名を超える参加者がありました。特別一般公開企画「植物病理学がマン

ガになった！」は大会同様にオンラインで、会員も非会員も参加できるトークイベントとして開催されました。

土佐幸雄氏（神戸大学大学院教授）が「日本農学賞」/「読売農学賞」を受賞されました。おめでとうございます。

最後に、今年度の学会ニュースは、上記学会ニュース編集委員コーナーにある委員で編集を行います。これからもどうぞよろしく願いいたします。

（門田育生）

---